

## 学校設立から150年 まちと学校

明治6(1873)年、武蔵野市に小学校が設立されてから、令和5(2023)年で150年を迎えました。

学校が設立される以前の地域での学びの場から、近代的な教育制度による学校の誕生とその後の変遷まで、  
今に至る「まちと学校」の歴史を振り返ってみましょう。

### 小学校の原点は お寺の寺子屋だった

小学校が設立される以前の江戸時代、子どもたちの教育を担っていたのは寺子屋でした。寺子屋は「手習塾」とも呼ばれ、僧侶、武士、神官、医者などが師(先生)となつて、子どもたちに読み・書き・そろばんを教えていました。

今の武蔵野市域には、かつて吉祥寺村、西窪(西久保)村、関前村、境村の4つの村がありましたが、江戸時代中期に関前村の延命寺八世亮春が主催したのが最も古い塾だとされています。亮春の没後の宝暦11(1761)年に、筆子と呼ばれる弟子たちが師をしのいで境内に建てた「筆子塚」が、今も延命寺に残されています。また、吉祥寺村には名主の松井十郎左衛門(仙路翁とも呼ばれました)が主催した塾があり、天保6(1835)年、こちらも師を慕った筆子たちが蓮乗寺に筆子塚を建て、今も境内に「仙路翁墓碕碑」として現存しています。当時から武蔵野市域には子どもたちの学びの場があり、教える側と教わる側との間に深い絆があったことを感じさせるエピソードです。

明治に入ると、日本政府は近代国家を目指すべく欧米諸国の学校制度を取り入れ、明治5(1872)年に公布した「学制」によつて、すべての家に不学の者がいないようにする「国民皆学」を掲げました。こうした流れを受けて武蔵野市域では、明治6(1873)年、吉祥寺に研礎学舎、西窪と関前に三省学舎、境に栄境学舎がそれぞれ誕生します。これらが、現在の武蔵野市内の公立学校のはじまりです。

当初は、寺子屋の流れから学舎はお寺の一角に開かれました。研礎学舎は安養寺を仮校舎として開校され、村の6歳から12歳までのすべての子どもが入学するはずでしたが、実際に入学したのはその約半数。年齢の違う男女が

量の上で正座をして授業を受けたといえます。学び舎がお寺ということもあり、「お寺の西北には閻魔大王を祭った部屋があり、いたずらをした子どもはそこに立たされるため、研礎学舎設立当時の子どもは非常に行儀がよかつたようである」と、研礎学舎の流れをくむ後の第一小学校の記念誌に記されています。

当時の農村地域は、経済的には決して豊かとはいえませんでした。武蔵野市域の村でも、生徒側が払う月謝や政府からの「小学委託金(後の小学扶助金、補助金)」だけでは学校の運営費用をまかなえず、当時、村の管轄だった神奈川県の助成金や村の伐木売上金、村民からの集金などを充てていたといえます。近代化へと向かう世の中にあつて、未来を担う子どもたちに分け隔てなく教育を受けさせたいと願う人々の大きな期待が感じられます。ちなみに明治8(1875)年時点での就学率は、研礎学舎が50%、栄境学舎が38%だったといえます。

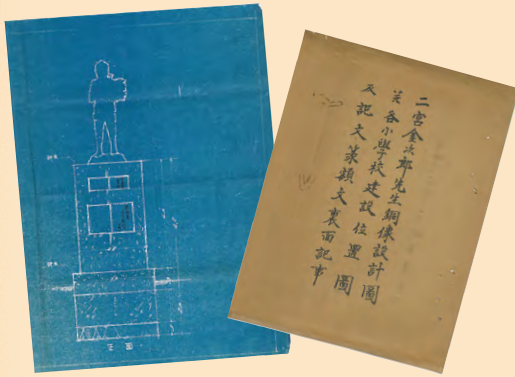
その後、武蔵野市域の3つの学舎は時代を経て尋常小学校や国民学校と名称を変えながら、研礎学舎は現在の第一小学校、栄境学舎が第二小学校へとつながっていくのです。



▲第二尋常小学校(『武蔵野市教育史』より)

## かつて武蔵野市域にも 二宮金次郎像があった

大正12(1923)年の関東大震災後、都心からの移住者が増加したこと  
で宅地化が進み、学校の需要も高ま  
ります。昭和3(1928)年には武蔵  
野村から武蔵野町となり、武蔵野村の  
村長だった秋本録之助が初代町長に就  
任。録之助は東京府議会議員や武蔵野  
信用組合長を務めた地元の名士で、武  
蔵野市域の4校に二宮金次郎(尊徳)  
の銅像を寄贈したことも記録に残され  
ています。二宮金次郎といえば、江戸  
時代後期、農村復興に尽力した農政家  
薪を背負いながら本を読む姿は理想的



▲二宮金次郎像 設計図(武蔵野ふるさと歴史館蔵)

な子ども象徴として、全国の学校に  
その銅像が建てられたのです。

ところが、第二次大戦中、武器や兵  
器に転用するために行われた「金属供  
出」によつて、お寺の釣り鐘などと共  
に金次郎の銅像も回収されることに。  
この時、子どもたちには、銅像を無理  
やり回収するのではなく、「二宮金次  
郎自らがお国のために出征した」とい  
う教え方をして、当時の国民学校では  
金次郎の銅像が生徒らによつて盛大に  
送り出されたといひます。

武蔵野市域で実際に金次郎像が供出  
されたのかどうかは定かではありません  
が、現在、市内に金次郎像が建つ学  
校がないことを考えると、この時に供  
出された可能性が高いといえます。実  
物を見たことはなくとも、誰もが知る  
学校の象徴ともいえる金次郎像ですが、  
かつては理想とされた「勤労・勤勉な  
子ども像」は時代とともにその役目を  
終えたのかもしれない。

## まちの発展とともに 移り変わる学校の姿

第二次大戦後の昭和22(1947)  
年、政府から教育基本法と学校教育法  
が公布され、小・中・高・大を「6・

3・3・4制」とする新たな教育制度  
が取り入れられるようになります。同  
じ時期、武蔵野町は市制を施行して武  
蔵野市になり、戦後の復興、6万人か  
ら12万人への人口の急増、さらに新教  
育制度の施行と、大きな変革期を迎え  
ます。昭和40(1965)年代に入る  
と、武蔵野市長期計画で「教育都市を  
めざして」というスローガンが掲げら  
れ、教育環境の拡充がなされました。

ちょうどこの頃、ノーベル物理学賞  
を受賞した物理学者の朝永振一郎が武  
蔵野市に住んでいたことをご存じでし  
ようか。昭和37(1962)年から市  
内に住み、昭和40年にノーベル物理学



▲朝永振一郎(左)に花束を渡す子どもたち(武蔵野市蔵)

賞を受賞、昭和42(1967)年に武  
蔵野市の名誉市民にも推挙されました。  
市内の小・中学生がノーベル物理学賞  
受賞のお祝いの花束を朝永に渡す写真  
が残っています。朝永の偉業は、武蔵  
野市内の子どもたちや市の理科・科学  
教育にも少なからず影響を与えたとい  
えるでしょう。

3つの学舎からはじまった武蔵野市  
域の市立小学校は、さまざまな変遷を  
経て、現在12校になっています。明治  
維新後の近代教育は、どのような家の  
子どもでも等しく教育が受けられるよ  
う、「家や身分と切り離す」教育を目  
指しました。戦後は教育制度の確立に  
よる教育水準の向上が図られました。が、  
いま学校に求められているのは、子ど  
もが学ぶ場としてだけでなく、地域と  
積極的に関わっていく、地域もまた学  
校と深く関わっていくコミュニケーションの  
拠点としての姿です。学校と家だけで  
完結するのではなく、地域全体で子ど  
もの学びや成長を支えていけるような、  
より開かれた「地域との結節点」とし  
ての学校が求められているといえるで  
しょう。これまでの武蔵野市の学校の  
変遷と携わってきた人たちの思いをか  
みしめながら、これからの学校とまち  
のあり方を見つめていきたいものです。